

石家莊近在の古蹟 (下)

小野勝年

正定の古建築

正定には隆興寺の他にも猶幾多の古建築がある。既に汽車の窓からも見られた天寧寺の木塔や開元寺の方塔の外に廣惠寺の花塔、臨濟寺の青塔等があり、その他開元寺の鐘樓や縣文廟の大成殿、陽和樓の如きが數へられる。猶又、前寺・後寺及び崇因寺なども、正定でこそ大したものとして數へられては居ないが、他所に比較するならば注意す可き存在である。

天寧寺は隆興寺の西方に當り、稍々低地に位置して居た。今は唯だ塔と小殿とを残すのみで殆んど廢址に近い感じがした。一般には唐の咸通年間の創建だと傳ふるが、碑記の見る可きものも無く、其の歴史を語るものとは塔のみである(第四圖参照)。これは九層八角の博木

混用の建築で、頂部には今にも崩落ちそうに傾いた鐵裝の相輪が飾られて居た。相輪は腹の太い不恰好なものであつたが、恐らく剝柱が折れて上部を失ひ、これのみが残つて居るが爲であらう。第一層正四面に入口を設け、他の層にはアーチ形の窓を開いて居た。各窓の出が短かく而も上層程間隔が狭つて居り、其の感じは稍々ぎこちないもので、而も簷下の斗拱の如き、様式は左して舊いとも考へられぬものであつた。蓋し此の塔に關しては從來未だ明確な年代が定められては居ないらしい。然し建築の外貌全體が示めず感じは決して明清時代のものには非らず、創建を金元に溯らしめるものだと思はせるに充分であつた。生憎入口は泥土で閉込められて内部を看ることの出来ぬのが残念だつた。

開元寺は城内の中心近くに位置して居る。一に解慧寺



景全塔利舍寺願本鹿獲 圖二十第



面南塔利舍寺願本鹿獲 圖三十第

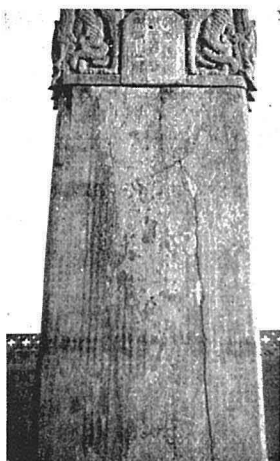


隅南東塔利舍寺願本鹿獲 圖四十第

第十圖 正定隆興寺金廣惠大師舍師塔



第十一圖 正定河清郡王李寶臣紀功碑





像玉白齊北圖七十第

第十五圖 趙縣栢林眞濟國師塔



橋濟安州趙圖八十第

第十六圖 趙縣宋佛頂尊勝陀羅尼幢



橋美濟州趙圖九十第

と云ひ東魏の創建、唐の重修と傳へられる古刹である。塔を目當てに尋ねて行くと境内は意外に狭少で、山門と本殿以外には塔と鐘樓とを有するのみで、而も今は僧侶も居ないらしく、巡警が駐住して居た。鐘樓は本殿の前側東、塔は西であつた。鐘樓を先に見る。これは三間四面重層で、下層は塼壁、上層は板壁であつた。簷下の斗拱は簡勁な木割を用ひ、直接柱頭に置かれて居るのが注意を惹いた。而も第二拱には横拱がなく、枋には替木を附し、これを第二の縦拱が受けて居た。礎石は蓮華座式で手法も一樣ではなかつたが、其の技法は比較的手固かつた。但し礎石の徑圍に比すると現在の柱は稍々細い様に思はれた。これに依つて建立以後重修の行はれたことを推測せしめたが、然し、斗拱自體の示めす様式からは相當の舊さが窺はれた。樓内には今猶、梵鐘が掛つて居り、それは周圍三抱へ許りの青銅製のものであつた。縣志に、寺鐘可開三十里許。製亦迥異。蓋數千載物也とあるのがこれで、記銘は後世削除されたらしく、何等存して居ないが、恐らく唐代に屬する逸物であらう。塔の方は

珍らしくも方形の平面を有するものであつた。全體で九層あり、層毎に小さな窓を開いて居た。(第五圖參照)寫眞に見る西安の雁塔に似て居るが規模は小さい。近づくと初層の腰壁の兩端に一對宛、都合八體の力士像の浮彫が嵌入してあつた。戸口は南面のみに開かれ内に入ると正面に拙劣な塑佛が並び、内部は中空となつて、登階の出來ぬものであつた。縣志に依ると明の嘉靖・萬曆及び清の康熙・嘉慶年間に重修して居る。然し現形は明代の創建とすら解せられ、其の形式にも拘らず、新しい感がした。

廣惠寺は南門の近くに在る。俗に花塔寺とも呼んで居るが、行つて見ると天寧寺同様荒廢して居て、二三の碑と塼塔と小佛殿とを殘して居るのみであつた。縣志で見ると唐の貞元中の創建となつて居る。然し此處にある嘉靖三十一年の碑を讀むと魏隋の創建とあり、正統十二年碑には唐の高祖の時と述べて居る。

花塔は珍らしい構造を示し、八角四層の塔身を中心として其の四隅に六角一層の塔を附したものであつた。先

づ塔身は四正面にアーチ形の入口を設け、第二第三層には各々一個宛の窓を開き、別に假窓をも作つてある。第四層は不整な圓錐形をなし、表面には坐佛、獅子等を浮彫風に現はし、それを受けるに連瓣を以てして居た。獅子には上半身を現はせるものと頭部だけのものとの二種があつた。又八隅には力士をば恰も上部を保持する如く現はして居た。附塔の方は其の平面が扁平六角形を示し、第一層は塔身の第一層と組合はされて居る。従つて他の五面のみが外部に向ふ譯だつた。中央の一面にアーチ形の窓を現はし他の四面には假窓を施して居た。屋頂には各々一見喇嘛式な塔を飾り、これを受けるに連華座を以つてして居た。塔の各層簷下には斗拱を組み、それは外斜開きの所謂花斗拱と名付けて居る形式を繰返したものが多く用ひられ、稍々繁褥な感じを興ふるものであつた。而も第一層簷下の場合には柱頭及び柱間の斗拱が單昂單翹であるに對し、更に兩者の間に配せられた一組は單昂單翹式であつた。後者はそれを受けて居る大斗と額枋との間に東「蜀柱」が全く現はされて居なかつた。若し

東(蜀柱)が表面に現はされるとするならば所謂透式建築の斗拱の中にこれと全く符節するものがあるのである。(第六圖参照) 借て此の塔の製作年代には未だ定説と云ふものはない様だ。尤も萬曆の十一年の重修碑記に依ると既毀三千金之皇統。復修三千金大定二也と見え、其以後明の景泰・弘治・正徳・嘉靖・萬曆等に修理され、更に清の乾隆にも行はれて居る。思ふに、屋根の勾配や喇嘛式の塔の如きは明清の重修を物語つて餘りがあつた。更に他の特色ある部分を以てするも大定再建説に絶對反對すべき點が見出されたのではない。但し、用椽が全然金代のものではないことが注意された。それは無文でもなく有條でもなく焼成の良い蓆文椽で、一般的な大きさは縦三六糎、横十八糎、厚七糎許りのものだつた。若しこれを唐代のものと解することが許されるならば金の再建の際傳のみは舊來のものを其儘使用したものだと言ひ得るのである。内部の結構を驗することは出来なかつたが、嘉靖の重修碑には内に釋迦・多寶二佛を安置した所謂法華經の經義に基く多寶塔だと記してある。これに對して一部

には亦、一塔を中心とし四塔を四面に配した外形から、所謂佛の五智を示したものであらうと云ふ様な見解も行はれて居る。此の説に依ると中央に大日、それをめぐつて阿闍・寶生・彌陀・釋迦〔或は成就〕等の五佛を配した意味に解せられるが果して如何であらうか。何れにせよ此の塔は珍らしい形として今後に興味ある研究題材を興へて居るものであつた。

廣惠寺から北に當つて畠中に物靜かに建つて居る塔が即ち臨濟寺の青塔であつた。臨濟禪は北支では現在相當宗として居るものがある様であるし、日本とも關係深い宗派である。右手の少し離れた所に回々寺院があつたが、此の他には別に民家もなく畠の中に塔と其の北側につましましやかな寺院の一郭が建つて居るのみだつた。臨濟寺は言ふまでもなく開祖臨濟禪師義玄和尚の住持して居たところである。尤も縣志に依ると寺はもと城の東南二支里臨濟村に在り東魏興和二年の建立だと記して居る。然らば和尚は生前其處に居たのだ。則ち彼の示寂した後、寺址が現在の場所に移轉したのである。塔の前方に一段

と高い基壇址があつた。それは恐らく天王殿乃至佛殿址であらう。それと塔の基壇とは甬道を以て續いて居た。

八角形切石積の上に建つて居る塔は北京天寧寺式で九層のもので、第一層の南面には唐臨濟寺照燈靈塔の八字の刻石が嵌入されて居た。須彌座の部分は切石を積んで補修してあつたが斗栱欄干以上は比較的損傷が少かつた。屋頂には蓮華座の上に鐵製の相輪を飾り、倒落を防ぐ爲四筋の鏈が屋根の四邊に垂れて居た。此の塔は均勢のとれた佳良な建築であつた。

元の納新の河朔訪古記には

〔臨濟〕寺乃臨濟祖庭。其靈塔則金世宗所建也。

と記して居る。縣志にも亦寺院が金大定廿五年、元至正三年、明正徳十六年、清雍正四年、道光十年等數度に互つて重修されたことを記して居る。然らば青塔は金代の創建と考へて略々誤りのないものであらう。後方の一郭は佛殿と僧房だけで、而も甚だ簡素だつた。佛殿内には釋迦像と達磨大師及び臨濟禪師の塑像等が安置されて居た。猶院子の片隅には一碑があつた。それには重修臨濟

塔記皇明正徳十一年云々の文字が讀まれた。

陽和樓に行く。陽和樓は南大街に跨つた宏壯な樓閣で、城内に於て恰も鼓樓鐘樓の如き位置を占めて居た。

博築の基壇部には二個のアーチを開き、此の上に七間入母屋二手先斗栱を有する大厦が立つて居た。これは遠望すると稍横の割合に高さの低い感じのする建物だつた。

上を仰ぐと北面には廣大高明の額が掛り、南面には陽和樓の額が掛つて居た。アーチの南面は中間に關帝廟が祀られてある。民家の院子を通つて基壇に設けられた階段をのぼる。樓は荒れて入口の扉も窓の障子もなく、内部は全く何物も存せず、唯だ二三の明清の碑や朱子の額字の模刻等があるのみだつた。河朔訪古記を見ると陽和樓に就いて、

眞定路之南門曰陽和。其門頗完固。上建樓櫓。以爲眞定帑藏之巨盈庫也。上作雙門而無棖桌、通過而已。左右

挾二瓦市。優肆娼門。酒罈茶竈。豪商大賈。並集於此。と記して居る。「上作雙門は下作雙門の誤り、棖桌は棖櫓の略であらう」。これに依ると此の建築は眞定路署の

南門(即ち子城の南門)にあたり、衛門の貨財を藏する倉庫として用ひられて居たらしい。然るに其の後明の洪武年間からは漏刻即ち水時計を置いて標準時刻を告ぐることゝなつた。尙て現存の建築は府縣志に記された元至正十七年建立の記事が裏書して居る様式を示して居る。然し別に府志所載の元楊俊民の重修陽和樓記に依ると此の年知府知縣等が圯敝を慮り、僧侶を役して重修せしめたのだと記してある。果して然らば建立は其以前であつたと考へなければなるまい、而も僧侶が重修に興つたとすると納新の記載とも矛盾する。或は帑藏として利用されたのも一時的なことで、矢張り最初から時刻報知の樓閣であつたかも知れぬ。南面の關帝廟に就いては府志卷八に至正十七年監那普顔の建つところだとある。現存の建築はそう古いものだとは思はれなかつたが、石作類には當代に屬するかと疑はれるものもあつた。猶門前の一對の鐵獅子には至治元年の鑄造銘があり、丈は八十釐餘りの小さなものであつたが、作も悪しからず珍らしいものだつた(第八圖参照)

正定には府文廟と縣文廟との二箇處の孔子廟があるの
であつたが、事變前には何れも學校として利用され、後
者は女學校となつて居た。然し私が其處を訪れた時は未
だ閉鎖された儘だつた。大成殿は會つて講堂に使用され
て居たものゝ如く、中に入ると若干の椅子や机が置いて
あつた。前に月臺があり、左右前には萬曆十八年重修縣
學碑と順治九年重修文廟碑が建つて居た。殿は正面五間
奥行三間の入母屋造りで、木割りの大きい簡勁な斗拱が

目を惹いた。(第九圖參照) 斗拱は直接柱頭に乗つて居る
點や、柱頭枋〔正心枋〕が密接せず、小斗を間にはさんで居
る點、及び二手先で而も第一椽の垂線上に拽枋のない點
などが、開元寺鐘樓下簷斗拱との類似を示して居た、然
し第二椽は直接梁頭を受けると共に、更に横椽を出し、
それが、簷枋並びに簷桁を受けて居た、遺言するならば
此處には舊い様式と共に明清建築に一般に現はれる新し
いものとが窺はれるのだつた。府志に依ると縣文廟は洪
武七年知縣洪子祥なる者が創建したと記して居る。然し
此の大成殿に、明初の建築と決定するには猶餘りにも舊

い様式を持つものであつた。漠然としては居るが尠くと
も宋金の建立に屬す可きものであることはどうしても否
定出來得ぬものだつた。殿後に廻ると一個の倒碑があつ
た。それは生憎裏面が現はれて居たが、文中には大德二
年云々などの文字が讀まれ、碑表或は此の建築の謎を解
くことが出来るかも知れぬと望みを掛け得るものであつ
た。

古碑のことども

城内には特に注意すべき若干の碑をも有して居た。其
の一が隆興寺佛香閣月臺前に立つ龍藏寺碑である。此の
碑は龜趺の半が土中に埋れ、碑身は御厨子の如く築いた
埽で蔽はれて居た。見事な螭首を戴いた此の碑は方眼の
中に文字を一字宛刻したもので、所謂六朝北派の書風を
止揚し、李唐歐虞の先蹤をなすと評されるのも過褒でな
い程雄勁な書體を示したものであつた。文は隋開皇六年
張公禮の撰するところ、刺史王孝德が州内の士庶一萬人
を勸請して龍藏寺を建立した意味を記して居る。此の碑

に關しては既に宋の歐陽修が其の筆法の勁拔を稱するに止まらず、更に其の所在地に就いても亦、

龍藏寺已廢。此碑今在常山府署之門後。

と記して居る。後ろに彼の此の記述が後世學者の間にも問題となり。碑の位置のことから、隆興寺則龍藏寺なりや否やの疑ひも生じ、遂には歐陽修は碑を實檢せず、他から聞いた不確かな話を其の儘記したのであらうとさへ評するに至つたものである。自分も亦歐説を信じ難しとし、此の碑の古くより現位置に存したとの見解に従ひ、隆興寺則龍藏寺と考へて居る。

隆興寺を出づると其の東隣に一個の經幢が立つて居た。それは大理石造りで高さ五米許り平面は八角形の見事なものだつた。下層は覆蓮華座を以つて初まり、上に雲に乗れる人物の如きものを現はし、次に四頭の獅子を更に八體の力士と二重の仰蓮華座があつて銘柱を受けて居た。銘柱には鎮陽龍興寺河北西路都僧錄改授廣惠大師經幢並序、尊勝陀羅尼を勅し、大定二十三年十月一日造經幢功德主人順道建匠人恒嶽等々の句も亦讀まれ

た。其の上には獸面つなぎの花蔓と佛とを刻した座が置かれ、第二層の石柱には各面三字宛に、大金國河北真定府都僧錄改授廣惠大師舍利經幢銘と大きくあらはされ、これに一面二體都合十六の羅漢や八體の菩薩等を刻した座が乗つて居た。(第十圖參照) 屋頂は落ちてなくなつたらしく、その部分は稍々物足りなかつた。この經幢は彫刻面に於ける複雑さが多く其の爲稍々華飾に過ぎ、均勢の點から云へば基部にもつと太さが欲しくも感ぜられはした。然しそうした多少の難點があつたとしても經幢類に於ける金代の代表作として推すに足る尤物と思はれるのであつた。

猶、一個の碑は河清郡王李寶臣紀功碑である。それは府衙西街を西に入つた小路の傍に立つて居た。龜趺だけでも高さ一米三〇餘りの大牌で、頗る寫實的な龜の形と螭首の雄麗さが先づ目を惹く。額には篆書で大唐清河郡王紀功載政之頌と記し、碑文は稍々行體を加味した遒勁な筆致でものされて居た。(第十一圖參照) これは代宗永泰二年に王佑が文を撰し、王士則が書き、其の内容は當

時の成徳軍節度使であつた李寶臣の業蹟を稱へたものである。勿論この頌文は寶臣が部下をして奉らしめる様に敢て仕向けたに相違あるまいが、それにしても當時の節度使の勢力を語る屈竟の資料である。蓋し寶臣は、奚族の出身と云はれ、安史の大亂には却つて逆賊に加擔した梟雄であつた。其の後唐室に歸附はしたが、田承嗣等と結んで依然陰然たる獨立情勢を示して居た。此の碑はその形制に於て唐代の代表的傑作であるばかりでなく、かゝる歴史的な意味に於ても興味深い、既に葉氏が金石補錄で考證して居る様にこれに依つて正史を補正し或は裏書することも出来るものである。現在、碑面を見ると文字が缺けて全く讀み得ない部分が多いが、それは唯だ歲月經過の爲の磨滅ではなく文意を忌避し故意に破損して居るところが多いのであつた。

獲 鹿

三月七日の早朝であつた。獲鹿へ行かんと石家莊驛に急いだ。當時、正太線は一日一回しか汽車がない際なの

で驛頭は随分混雜して居た。勝手がわからずぐ／＼して居ると、汽車が將に發せんとする。幸じて乗車はしたが、少々の手違ひで不親切な一兵卒に依り無理に下されてしまつた。自分は不愉快な其の一日を又、石家莊で暮さねばならなかつた。然し、翌朝はどうにか乗車し、遂に獲鹿に到ることが出来た。縣城は驛から少し離れて居た。日は稍々のぼつたが冷氣が身にしみる、連の蕭光陰と片言の支那語を交へ乍ら歩いて行つた。山を背景とした城外は實に美しい眺めだつた小川を渡つて間もなく城内に入る。

蓋し、獲鹿とは唐の玄宗の末年以來の縣名であつて、其の以前は鹿泉縣と稱して居た、隋の開皇十六年、石邑縣から分れて以來鹿泉の名が行はれたのである。昔、韓信が趙を伐つ可く、井陘を下つた際、此の邊で敵將陳餘と激戦せねばならなかつた。背水の陣の故事なども其の時のことで例の微水も此處から四つ目ぐらひの驛名となつて居る。鹿泉の名も此の役と關係がある。それは水の缺乏に惱んで韓信の軍隊が泉を求めて進んで行つたとこ

る、山麓から突然二頭の白鹿が跳び出した。其處に行く
と果して滾々たる一泉が湧出して居た。そこでこれに命
名して白鹿泉と稱したと云ふのである。今、縣城八支里
虎王塞を流るゝ泉がそれだと傳へ、附近には泉神祠があ
り、境内には有名な開元二十四年の白鹿泉神祠碑も存在
して居る筈である。

鹿泉が獲鹿と改稱されたことにも亦た理由があつた。
それは實に安祿山の叛亂と關連する。玄宗の末年、即ち
天寶十五載に起つた此の叛亂は唐の社稷を根本的に動搖
せしめたもので、戰禍は直接北支全般に互つたが、間接
には海を隔つた我が邦にまで及んだものだつた。舊唐書
玄宗本紀、天寶十五載三月の條を見ると、常山郡を改め
て平山郡とし、房山縣を平山縣、鹿泉縣を獲鹿縣、鹿城
縣を東鹿縣と稱することゝしたとの記事がある。此等の
郡縣名は悉く河北に屬するものである。而も大亂の年に
改稱されたことに思ひ及ぶと、云はずしてこれが叛亂の
平定と鹿山の獲擒の意を偶する改名であることが明白で
ある。獲鹿の名は以來今日まで行はれた。石家莊も實は

同縣に所屬して居る會ての一寒村であつた譯である。

本願寺の舍利塔

本願寺とこゝで云ふのは唐の開元七年創建と傳ふる
獲鹿の本願寺のことである。

寺院は城内の北に寄り殆んど北壁を背にして居た。山
門は閉された儘だつたので側門に入る。奥の方には一段
と高い月臺があり、上に佛殿が立つて居た。それは正面
五間の入母屋造りであつた。月臺の前には碑や經幢が並
立し、殿と山門との中間には八角の塔塔があり、其の前
には一基の石造舍利塔が立つて居た。此の舍利塔こそ私
が獲鹿に至つた目的物に外ならないものであつた。

(第十二圖参照)

舍利塔は四米平方高さ一米二〇許りの石積の壇上に安
置され、擧高約三米、方形一層で一見して房山雲居寺に
ある唐の石浮圖に似て居た。唯だ後者が中空で、内部に
佛像等を安置する式のものであるのに對し、これは四面
に佛像を浮彫にしたものである。先づ塔の基部から看察

しやう。それは須彌壇と蓮座とからなつて居た。前者は腰束を中間にし上下に各三層の出張りを造つて居た。彫刻は腰束のみに施され、各面共中央に力士、左右に樂天を配して居た。蓮座は瓣先捲きの重瓣覆華であつた。其の中央部は各面共に切込みがあり、其處に何れの時代か香爐の如きものを嵌入したのであらうと考へられた。塔

身は幅一米二〇高さ一米一二、約正立方形に近い一枚石を使用したものであつた。四面の佛は龕形の中に現はされ、本尊は趺坐〔東西のもの〕と倚坐〔南北のもの〕とがあり、其の左右には羅漢形〔阿難迦葉〕と菩薩形〔觀音勢至等〕とを侍立せしめて居た。(第十三圖参照) 龕側にも各一對の守護神が配され、これは武装して動物を踏臺とした護法天〔南北〕と、半裸體となつて岩上に踏張つて居る執金剛〔東西〕であつた。龕櫓の頂部に當つては獸面があり、恰も頂部を銜へるかの如くである。(第十四圖参照)

其の左右には外向きの飛天各一體を現はして居た。佛の光背の模様、臺座の形式、或は菩薩の持物、更に本尊の印相等に關する細部的な比較對照を試みると相當の異同

はあるが、總體に於て各面共に左右相稱を示めした類似の構成が看取された。屋部亦重層で、下層は四注の屋簷を示し、簷下には蓮瓣帶を現はして居た。上層は何物かを受くる如き外開きの蓮華を示す。後者或は曾て相輪の如きものを受けて居たのかも知れない。

偕て、舍利塔のかゝる様式が何處に初まつたかと云ふ詮索に就いて、未だ充分に用意の出來て居ない私は其の様式論を試みる資格には缺けて居る。ふくよかな相好に現はれた童顔、三筋の勁線、丸々と肥つた乳のほひでもしそうな身體、薄もの、着衣、其の線の流暢さ、そうしたものが本尊には滿々て居た。それは亦脇侍達にも現はれて居るものであつた。菩薩の腰がくの字にひねつてあつたとしても、其處に感ずるものは童兒の姿である。飛天にしたところで、或は筋肉等を寫實的に盛上げた執金剛にしたところで、北魏刻の彫を見た目では内部からはみ出た力が缺けて物足らなさを感じない譯ではない。然し、そう評しさればそれまで、はあるが、此處には此處で小さい乍らも一つの世界の展開が看取される。下層の蓮

座を例にとつてみても既に北齊の様式を止揚した新しい勁さが窺はれ、而も此處にはやがて宋金に流れる或る部分も現れて居る。佛像を例にとつて觀るならば、我が白鳳期の或る種のものと同様感ぜしめる。然し、勿論これを以つて唐期の代表作とする譯ではない。若しそうした言を聞いたなら龍門奉先寺の露大佛等が怒り出すであらう。要する唯だこゝでは盛唐期に屬する一個の掬す可き逸品を認め得たと云ふだけで結構である。私には長い間望んで居た此の舍利塔を見ることが出来、それだけで唯だうれしかつた。

舍利塔の南面には博を以つて蔽ふた一個の碑が立つて居た。書は見事の行體で、石面は稍荒いが、大分鄙讀むことが出来るものであつた。螭首龜趺も比較的整つて居た。これが即ち唐の開元九年の本願寺舍利塔並北臺石像之碑であつた。勒された文意は金玉束帛に要するに精神を馳喪するものに過ぎないから、靈塔を建立して界劫を經綸するがよい。そこで鹿泉の信士畢瑜は張成其他を糾合して造塔に着手した云々と述べ、更に四面の造像に關

しては、

鑿_ニ華_ノ額。製_ニ金_ノ容。廣_ニ良_ノ業。厥_ニ有_ニ砥_ノ信。昌_ニ言_ニ左右。維_ニ南_ノ有_ニ佛。實_ニ維_ノ慈_ノ氏。畢_ニ公_ノ所_ニ立_ノ崇。願_ニ將_ノ來_ニ冀_ニ其_ノ下。北_ニ面_ノ而_ニ事。爰_ニ有_ニ淨_ノ邑_ノ長_ノ老_ノ王_ノ□□□五十二人。欽若_ニ神_ノ界。洗_ニ心_ノ安_ノ養。清_ニ修_ノ其_ノ本。式_ニ建_ニ彌_ノ陀。乃_ニ西_ノ其_ノ居。以_ニ正_ノ厥_ノ位。太_ニ原_ノ胡_ノ仙_ノ經。彌_ニ勒_ノ于_ニ北。所_ニ以_ノ發_ニ其_ノ蒙_ノ也。高_ニ尼_ノ明_ノ惠。設_ニ能_ノ仁_ノ於_ニ東。所_ニ以_ノ昭_ニ其_ノ本_ノ也。四_ニ子_ノ各_ニ以_ニ其_ノ志。競_ニ心_ノ方_ノ面。彫_ニ粹_ノ渥_ノ飾。

と記して居る。これに依ると此の舍利塔の四面佛は南面が慈氏則ち彌勒、西面が彌陀、北面が更に彌勒、東面が能仁即ち釋迦を本尊としたものであることが知られる。

建造の年代に就いては有唐開元八年。繕理畢。經始_ニ于_ニ今。廿_ニ有_ニ五_ノ載とあり、竣功まで實に廿五ヶ年を要したと記して居る。尤も此の碑記は舍利塔と共に北臺の石像のことをも述べたものである。即ち、先是故寺主振法師・故都維那知慈法師。桑門之道勝也云々と書起し、諸寺の僧侶及び郷邑の長幼が合力して國家の爲に釋迦の石像を建て、其の高さ二丈八尺あつた等のことが見える。従つ

て廿五ヶ年と云ふ様なことも石佛と舍利塔の製作に要した日数を合算したものだと思はれ、尠くとも石作着工に當つてそうした長年月を要したとは解せられない。

偕て、舍利塔と同時期に造つた釋迦石佛像に就いては更に佛殿月臺の前にある明嘉靖三十四年重建本願寺石佛塔記に、

〔本願〕寺故有石佛。高三丈餘。奉以大閣。繼大閣。煇於回祿。唯石佛巋然獨存。風雨淋炙者。且一百餘年。正德丙子間。文乘僑發願募緣。庀工建塔以護。

塔廣基銳頂。週環法像。中爲廻廊。甃以石磴。

登者絕壁巖附而上。直至穹窿絕處。與佛首齊。……
：塔凡年十甫訖功。

と記してある。これに依ると舍利塔の北側にある塔塔こそ正徳十一年から十ヶ年の歳月を費して建造した石佛安置の爲のしたものに外ならない。然し現在はこの塔内に唐代所造の石佛と云ふ様なものは見當らず、唯だ、南側の入口から奥に進むと暗がりの中に拙劣な塑作の立佛があるのみだつた。若しこれが塑を以つて塗固めた原像だ

とすると興味があるのであるが、どう見てもその様には思はれないものであつた。

境内には猶注意すべき石造物があつた。即ち開元七年所建の金剛般若波羅密經碑と同九年の佛頂尊勝陀羅尼經塔である。更に一個の經幢があり、それには應天神龍皇帝順天翊聖皇后と大書した文字が刻されて居た。蓋し此の尊號は中宗並びに則天武后に對して、景龍元年に臣下の者が上つたところである。縣志を見ると本願寺の創建は開元七年だとなつて居る然しこうしたものゝ存することや、舍利塔及び石像が開元八年を去る廿五年前即ち則天武后の萬歲通天元年には企圖されつゝあつたことから推測して、縣志の創建年代は疑はしくなつて來る。猶、塔塔の傍に一個の石獅があつた。高さ七八十糎もあらうか。小さいものではあるが、其の彫法に六朝後期の面影があり遅くとも唐初の製作に屬すると考へられるものであつた。

趙縣の栢林寺

三月十一日、バスで石家莊を發ち、趙縣に着いたのは夕方に近い頃だつた。縣公署に厚遇の一夜を過し得た私は翌日東門内にある栢林寺に向つた。

栢林寺に關しては河朔訪古記に、

趙州城中東門内。有栢林院。世呼爲趙州古佛道場。

蓋唐末僧趙州和尚脩業之所。舊在城外。後城既展。

而在東門内矣。

と記して居る。趙州和尚とは有名な眞際禪師從諗のことである。此の寺院は古來名刹として名高く、此の邊では游訪者必先栢林、次臨濟次五台と云ふ。但言すらある。尤も此の俚言も栢林と稱するところから推測して差程舊い時代から初つたものだとは解せられない。蓋し、寺院の創建は明確ではないが、唐代には觀音院、宋頃は永安院と稱し、栢林院の名は金代に初まつて居た様であるからである。而も、一般には古佛道場の名を以つて知られ、栢林寺と云ふ様になつたのは明以後であつた。

私は寺院の裏手から進んだ。附近に十數個の盛土があり、何れも比較的新しい墓だつた。近づくと白木の墓標

のある二基は我が兵隊さんのもので、それには歩兵少尉萩谷松雄之墓とあり、他には上等兵多田利吉戰死之地とあつた。戰死した人々の墓標に對することは此處が初めてと云ふのではなかつた。然し淺春の早朝、栢林寺の境内に佗しく立つて居る墓標に對すると、更に一人の物思ひに沈まざるを得なかつた。

境内が廣いので寺院の衰退荒廢は殊に深く感ぜられた。山門、鐘樓、鼓樓は既に滅び、現存して居るものは二陳の佛殿と右側に建つ塔と以外には碑碣の類だけだつた。尤も東邊には一郭の僧院が存して居るのではあつたが。

前方の佛殿は月臺を前にし、甬道を後にした正面五間入母屋造りの建築であつた。殿内には製作の三尊佛を安置し、左右には十八羅漢が並んで居た。悉く清代のものであつたが、蓮華座式の礎石は注意を惹いた。甬道の側に一碑があつた。それは明弘治九年重建栢林寺毘盧殿碑記である。然し殿自體は今基壇と礎石とのみを殘して居るだけだつた。其の後に亦、月臺を控へた一殿があつ

た。規制は略前殿と同様であるが、感じは舊く、或は明代の建築かと思はれた。殿の前には明嘉靖三十一年趙州栢林寺増修大慈殿碑記及び清道光の年間の重修碑が建つて居た。前者の碑側の模様は六朝や唐代に行はれて居る獸面唐草を配合したもので、力は弱いが、明代に於てかゝる傳統が猶殘されて居るのが如何にも面白かつた。碑記には重簷云々と此の殿に就いて記して居る。然し現存のものは實は單簷入母屋造りである。殿内に入ると二丈もあらうかと思はれる塑像千手觀音が脇侍と共に立つて居た。作品としては平凡で、却つて其前にある何處からか移置されたらしい鑄銅佛の方が注意を惹くのだつた。

寺院の西側に立つて居る塔は所謂北京天寧寺式であつた。(第十五圖参照) 二層の方形基壇の上に築かれ、八角七層、屋頂に鐵製の相輪を飾つて居る。南側の額部に大元趙州古佛眞際光祖國師之塔と云ふ刻石が嵌入してあつた。此の塔が即ち眞際禪師の舍利塔なのである。二段の花板を飾つた須彌座の上に斗拱を組んで欄干を支へ、其の上には更に四重仰蓮華の座がある。第一層塔身の正

四面には假戸が、斜四面には假窓が作られて居た。第二層以上塔身が急に短かくなつて居るのは此の式のものゝ通例であるが、第一簷の垂木が木を用ひて居るのに對し、他が磚を用ひて居ることは注意を惹いた。

此の塔に關しては前方の佛殿の左側にある明の成化十六年の補修趙州栢林寺光祖國師眞際靈塔碑記に不充分乍らも歴史が語られて居るそれに依ると、

戊子年〔後唐天成三年〕十一月十日……〔眞際禪師〕端座而逝……寶塔自此剏立。累朝崇奉不レ缺。殘金廢弛。泰定三年。寺主潛依其舊式増之。高廣須彌寶座。

壯麗九層。天曆二年十二月間。魯雲大復中興。奏請勅賜大元趙州古佛光祖國師之塔。仍勅大學士翰林院官撰書立石。當今聖朝萬邦一統。歲月綿長。而塔座雕。景泰壬申……協誠修葺。其功未完。成化己亥……鳩力募緣。庀工修補。今已落成。

云々と記して居る。即ち禪師の歿後間もなく寶塔が作られたのが、金代に至つて弛廢したので、元の泰定三年に僧潛雲が舊式に準じて寶塔を擴大し、九層の塔とし、天

曆二年更に魯雲が奏請して塔の題額を賜つたのだと解せられる。今、塔を見ると七層であつて九層ではない。然しかゝる誤りがあるとしても、此の碑記は比較的信用の置き得る記述であらう。そうすれば此の塔は實に元の泰定三年の築造である譯であつて、第一簷斗拱下の欄間に飾つた龍雲龍鳳の浮彫だとか、欄干の花唐草、さては塔の各所に用ひられた斗拱の如き、元式の一例として認む可きものであらう。猶、第一層正四面中三面には坐佛を現はし、南面のみには其の部分に當つて上記した如く刻石を嵌入してあつた。これは此の碑記に依つて、恐らく天曆二年に嵌入したものだと推測せられ、當初は他面と同様南面にも坐佛があり、合せて四體即ち四面佛を現はして居たのであらうと解された。然し須彌壇以下は後世重修の跡が著しい、これは明代以降累次の補修の結果に依るのであらう。

境内には幾多の古碑が存して居た。就中、宋の元豐八年永安院度僧記、金の大定七年沃州栢林禪院三千邑衆碑記、元の猴年〔至元十九年〕聖旨碑記等は特に注意を惹く

ものであつた。然し、これらは既に清の陳鍾祥の趙州石刻全錄に皆記されて居るものである。此の他虞世南書と云ふ附鳳翼攀龍鱗の六字を明代に模刻したものなども見受けられた。

僧院の納屋の様なところは二體の首のない菩薩像があつた。高さ四尺餘り、質の良い鑄銅佛で、衣紋、瓔珞等の出来も良く、一見宋頃のものと疑はれた。後室には佛壇があり、眞際大師の畫像石は其の薄闇りの壁に嵌入されて居た。辭して僧房を去らんとすると住持は茶を飲めと云ふ。寺見物の慣しに従ひ私は貧乏財布の口から一毛錢也を出した。すると彼は早速片手を擧げて押し止めた。それは全く虚を突れた形であつた。昔話の禪僧と豆腐屋の間答には似て居たがこれはこちらの敗北で、今も思ひ出しては冷汗を感ずる。

城内の經幢

城内の中央部、南北の大街に面して巨大な佛頂尊勝陀羅尼經幢があつた。(第十六圖参照) 此處は曾て開元寺の

境内に當つて居たと云はれ、經幢も亦同寺に屬するものである。黒味がかつた大理石を以て造つた此の經幢は高さ約五丈餘もあらうか。基壇は方形で一邊六米一〇高さ一米八五、須彌壇形をなし、上に建つ經幢は八角形の素振らしいものだつた。經幢の各層間には種々なる彫刻を施し、第一層幢身には南面に奉爲大地水陸蒼生敬造佛頂尊勝陀羅尼幢の十八字を篆體で示し、他面には經序と經文とを正書で刻し、最後には大宋趙州南園廂邑人等重特建幢子相輪記云々とあり景祐五年三月十八日建立の年號もあつた。記は經の部分に比較すると字體が劣るので後刻の疑問すら生ぜしめた。然し何れにせよこれは北宋時代を降らない經幢として頗る注目す可き尤品であつた。

細部の彫刻を見るに、基壇の腰束の各面には四ヶ處宛の栱門を設け、門の左右には執金剛を配して居た。幢部の第一層の臺座は亦た三層に區別され、下層は須彌座形をなし、八面各々には、蓮華座に坐せる樂天を三體宛現はし、中層には廻廊を造り、それには片屋根の簷及び斗栱柱楹すら彫出してあつた。廻廊の壁面には雲山塔閣佛僧

等を現はし、それは一見佛傳圖か極樂淨土圖かと解せられる構圖を示して居た。上層は須彌山を形どつたもので、中くびれの部分には蛇が捲き付き、其の上には雲山殿閣人物動物等を現して居た。かゝる須彌山の構想は既に雲崗の中央窟の一部などにも發見されるものではあるが、そうした傳統が此處にも窺はれる點尠なからぬ興味を呼ぶものであつた、第二層の臺座も亦三層に分れて居た。即ち花蔓を現はしたものと獅子や象の上半身を突出さしめたものと、仰蓮華座とである。後者には各花瓣毎に化佛を施して居た。幢身には南面に佛說大佛頂如來放光悉「恒多大神力都攝一切呪」王陀羅尼經大威德最勝「金輪三昧呪品」上の三十八字が大書され、他の面にも經文が刻されて居るが下からは判讀出來なかつた。第三層の座臺は第二層の繰返しと云ふに近く、唯だ獸首のある部分を缺き、花蔓座の各偶に一個宛の小蓮華を造り出してあつた。然しこれは六個が既に崩落して、今は二個を存して居るのみであつた。幢身には刻字があるらしかつた。然し餘り距たつて居る爲、下から仰ひだのでは判然

としなかつた。第四層には城壁に似た高欄を現はしこれを臺座として居た。其の各四正面には入口を設け、入口の左右には執金剛らしいものも居た。幢身の部分は戸窓を現はし、屋簷を造り、恰も殿形の如きを示して居た。

更に第五層の臺座は一面各一體の力士が雙手を以つて欄干を支へて居るものであつた。幢身には文字が有るのか無いのか全く不明であつた。其の上に猶二層の蓮華座が置かれ、最頂には青銅製の擬寶珠が乗つて居た。蓋し此の經幢は八角五層幢と名付く可きものであらう。縦横の均勢のとれた實に堂々たるもので、其の大きに於て、彫刻の優秀な點に於て、恐らく支那屈指の經幢であらう。尠くとも私の親しく瞻た限りでは、南京棲霞寺の舍利塔と共に此の種のものゝ南北を代表する作品であつた。

城内には此の他猶記す可き若干の金石類があつた。それは縣公署に現存する東魏定州刺史李憲の墓誌銘とか、宋の景祐三年の太平興國院重建定光如來真身舍利塔靈樞記とか或は文廟にある宋の大觀聖作碑、大中祥符元年玄聖文聖王贊并序碑等であつた。これらは各々特色を有す

るものであり、特に靈樞記の勒された石棺等に就ては語る可きことを有するが、今度は割愛することゝしやう。

大 石 橋

滄州の獅子と應州の塔と正定の菩薩と趙州の橋とは北支那に於ける四大勝跡として郷土の人々の膾炙するところだそうである。私の趙縣行の目的は一に大石橋見學にかゝつて居た。地圖を按ずるに橋は縣城南門外を去る約五支里、洩水に架せられて居るもので、此處の見學は差程困難なものだとは思はれなかつた。石家莊の石田特務機關長の厚意に依り、豫め警備隊とも聯絡がつき、御蔭で其の際は警備の兵隊さんが護衛して呉れる手筈になつて居た。

三月十三日、朝からの曇りで、午後には風すら加はつた。縣公署前には數頭の乗馬も用意され、其の一头は自分の爲のものだつた。支那に來てから驢馬には乗つたが、馬は初めてで、多少不安ではあつたが、兎に角く騎る。一行は南門を出て栢郷縣に至る街道を前進した。晝

中の平凡な坦道を行くこと一時間足らず、一部の人家に達した。其處が即ち大石橋村で、部落外れに目的の橋があつた。

趙州の石橋を大石橋と云ふのは實は俗稱で、安濟橋と云ふのが本名である。これは隋代の石匠李春と云ふ者の作るところと傳へ、舊くから名高く、従つて此處に關しての詩銘題記等の類は尠くない。中に就いて唐の張嘉貞の安濟橋銘は最も有名且つ重要なもので、刻石は既にはれたが、原文は幸に史籍の傳ふところとなつて居る。それは

趙州洩河石橋。隋匠李春之跡也。製造奇特。人不知其所。以爲一試觀乎用石之妙。楞平礎斷。方版促郁。絨穹隆崇。嶮然無_レ極。吁可_レ怪也。(下略)

と記されたものである。蓋し嘉貞は則天武后の時、監察御史に任じ、玄宗に仕へては中書令となり、書を巧みにし、歴代名畫記の著者張彥遠とも血縁關係を有つて居る、今既に亡失してはしまつたとしても、彼の銘文が相當信用するに足る記述であることは認められやう。

現在、橋は乾涸した河上に架せられて居た(第十七圖參照)其の幅は七米、長さは四十米餘り。兩側に欄干があるが、後代ものであり而も、東側は破壊した儘になつて居るから、元來の橋幅は八米以上を數へたと考へられる。通路は後の補修に依るものであるが、恰も歩道を挟んで車馬道を一段高く造つた様にしてあつた。橋を渡ると其處には關帝廟があり、廟下にはアーチ形の門を開き人馬は必ず此處を通過しなければならぬ仕組である。曾つては——否、現在もそうであらうが——此處で通行者は檢問され徵稅されたであらう。石のない河床に降りて石橋を見ると、三日月形の大アーチが河幅一ぱいに跨り、其の兩端に各二個の小アーチが造られ、都合五個の孔がほどよき釣合を示して開いて居た。大アーチの下に立つて石の組み方を檢すると、一行一行が縱列に並び、行間は齒車の様には組合されて居ないのであつた。其の結果に行と行との聯結が弱く、東側の三行は崩壞して、今は二十五行となつて居るのである。小アーチの内には宋金元明の各時代の詩銘題記などが残つて居た。南側の

アーチの端に將に崩れ落ちんとして居る刻石があつた。近づいてそれを讀むと天水趙延夫被詔赴闕過此。宣和甲辰季冬十八日題と勒されて居た。自分はそれを讀み乍らふと古人の餘裕ある旅がなつかしまれた。然し彼等も亦自ら石に勒したのではなく、若干の金を與へて附近の者に命じたのであらう。

趙州志の藝文の條を見ると、明の張居敬の重修大石橋記がある。それに依ると、明初薪賣を業とする者があつて橋下に薪を積んで置いたところ、それが燃焼し、其の結果腰鐵が剝削した。加之、上面は歷年の輻重の爲、くぼみが出来ていたんだので、萬曆二十五年に重修した云々と記してある。若し果してこれが最初の重修の記録だとすると隋代造營以來一千年近くも大した損破がなかつたことゝなる。然し此處には古くから相當の交通量があつた筈であるから、恐らく其の間、數度の重修は行はれたに相違ない。それにしても完全な半圓形とする場合、直徑五五米もあらうと云ふ大アーチを今を去る千三百年前に組立て、それが今日依然として利用されて居ると云

ふのだから、どう考へても一つの驚異には相違ない。萬曆の重修以後橋の西面が崩壞したので、乾隆年間補修することゝなつた。然るに其後又東側が崩落した。然しそれは未だ今日まで修復されず、放つた儘となつて居た。歸途洩水に沿ふて西北行し濟美橋をも見ることゝした。此の橋も亦洩水に架せられて居て安濟橋とは程遠からぬと聞いたからである。宋村と云ふ部落を外れると西方に小高い丘があつた。丘の上に三個の石佛が安座して居たそれを究める爲に一行は丘に向つて進んだ。すると石佛の前には更に三體の石像が土上重つて倒れて居た。

素晴らしい北齊の白王像であつた。(第十八圖参照)私には生れて初めてと云ふ様な驚異と歡喜との感情に心を躍らせたのである。痛しくも頭手を失つた乳白色の大理石彫像がうつ臥せとなつた儘倒れて居るのであつた。本尊は丈三米餘、脇侍は約二米、何れも立像であつた。附近には流麗觸れるに惜しい様な臺座もころがつて居た。其の一個には、

天統五年四月八日道俗□爲田與福敬造□□像一區記

云々

と僅かながら讀み得る造像記もあつた。坐佛の方はそれに比較すると時代も新しいものであつた。恐らく元、或は明代のものであらう。高さ約二米、豐滿な相好を示し均勢もとれ近來のものとしては佳作の部である。丘の東側に塔が建つて居た。塔前の石柱に西林石佛寺住持普明淨慧大禪師柱嵩長老塔銘至正八年十一月二十八日立石云々の小字が勒されあつた。これで此處が宋村石佛寺の廢址であると知り得た。

濟美橋は其處から差程遠くはなかつた。今は交通も閑散であるらしく、畠中の乾河に佗しく架せられて居る形であつた。洑水は古くから雨期にでもならないと流水のない河なのである。此の橋は安濟橋に比較すると規模が小さく、橋の長さも約半分であつた。兩側に欄干を設け、下部には二箇所の大アーチを開き、それを挟んで三個の小アーチを穿ち、それは五虹橋と云ふより五孔橋と呼ぶのがふさわしいものであつた。側面には騎馬像や河神像が浮彫され、後者は恰も漢式鏡に表はれた仙神像に

彷彿たるものであつた。

趙州志卷一には

濟美橋在宋村東北里許洑水上。萬曆二十二年。花馬營貞孀充王氏損貲重脩。名濟美者所以成先夫志也。

とある。これによつて此の橋の建造が少くとも萬曆以前に屬することが知られる。様式上から見ると所謂虹式と大石橋式の間系統を示し、大小のアーチの組合せに變化があつて、現代人の感覺にも應じた頗る美的な橋梁と考へられる。(第十九圖参照)

趙縣には更に著名な一石橋があつた。それは縣城西門の手前、護城河に架せられたもので、私達の乗つたバスは此處を通過した譯であつた。永通橋が本名であるが、普通には大石橋に對して小石橋と呼んで居る。これに就いては明の王之翰が、

橋不楹而登。如鴛之虹。洞然大虛。如弦之日。旁挾小竇者四。上列倚欄者三十二。締造之工。形勢之功。直足頽頽大石(橋)。稱難於天下。(趙州志

卷十四、重脩永通橋記。

と述べて居る。小石橋の俗稱に依つて明かな通り、其の構造は大石橋と全く符合し、唯だそれを小としたものであつた。然も交通の衝に當るだけに現在橋は完好で、旅する者にもうれしかつた。特に目を惹いたのは石欄干の彫刻であつた。欄版の両面には人物・動物・山岳・樹木等を現はし、彫抜きの東は駝峰や蓮葉形を示して居た。駝峰のある欄版の方は彫も深く、側には各々題記をも勒してあつた。それは、

本州西關廂居住捨財住人葛劉造构欄臺間修造善人馬隆
正徳二年八月十九日立

など、讀まれるものであつた。蓮葉形を示した欄干の彫刻は平彫で製作は更に新しく感ぜられた。橋側にも彫刻があり、獸首や神面や魚や天馬の類が表はされ、而もそれらの或るものは可成り風化磨滅して居た。

偕て此の橋の築造年代は何時頃に屬するであらうか。趙州志〔卷一〕には、永通橋は西門外の清水河上に在るが、建置は始るところを詳かにしない。南に大石橋があ

るからこれを小石橋と呼ぶ、と記して居るのみだ。然るに河朔訪古記を按ずると

趙州城西門外。平棘縣境。有永通橋。俗謂之小石橋。方之南橋。差小。而石工之製。華置尤精。清浚二水。合流橋下。此則金明昌間。趙人哀金而建也。建橋碑文。中憲大夫致仕王革撰。橋左復有小碣。刻橋之圖。金儒題咏併刻三十下。

と記して居る。著者納新は元代親しく此處を訪ひ、金明昌年間の建橋碑を目撃した筈であるから、此の記載は相當信用が置けるであらう。加之、藁城縣の東門外にあると云ふ凌空橋の如きも、寫眞で見ると同一様式に屬し、而も建造は金の太和中であると稱されて居る。然し、永通橋に就いては畿輔通志金石略に、橋石中宋代の題名が存するから、其の建置は更に舊いであらうと云ふ様な反對説もない譯ではない。納新が目親したのも、金石略に引用された宋代の題名をも檢し得なかつた私はそのことに就いての決定を急がず、唯だ今後此處を訪れる人の爲に記して置くまでだ。